

『道徳教育』一九六三年四月（発行元不明）

## 道徳の時間は道徳教育を推進したか（その1）

矢口 新

### 道徳教育は推進した

この問題は考えてみるとなかなかむずかしい、答えにくい問題である。一番単純な答は次のようであろう。今まで、道徳の時間がなかったのに、新しく特設した。週一時間という時間がふえた。今までなかったのだから、道徳時間で行なう教育は行なわなかったが、今度はそれが行なわれるようになった。即ち道徳教育は推進された。つまりなかつたものがふえたのだから、これを推進といわずして何といおうという答である。

こういう考え方の人は案外に多いのである。私がいろいろな人について聞いてみると、かなり多くの人は、素朴に、そう考えていることがわかった。とくに子どもの両親などは、手放しで喜んでいる。もうこれで安心できるという人が多い。現代の子どもの教育についての一般の人々のもっている考え方からすれば、当然であるかも知れない。そしてある意味で筋が通っているのである。つまり道徳教育というものを、今の学校の他の教科の教育とおなじ形で考えるならば、今の学校に、そういうものが入るべきである、時間としてちゃんとおかれるべきだと考えているところがおかしいという見方も成り立つわけである。

今まで、そういうことをしなかったのは、おかしいではないか、殊更にそれに反対する人がいるのは思想がわるいのではないか。こうい

う風な意見もそこにはある。そして愛国心や公共性や家庭の道徳などを教えてくれれば、これからの人間はちゃんとした考えをもつてくれるようになるであろう。万々歳であるということになる。

そういう考えに立つならば、道徳時間は道徳教育を推進したかなどという問題の出し方がそもそもおかしいことである。理くつに合わない。なぜそんな妙なへりくつをこねなくてはならないであろうかということにもなる。

道徳時間が道徳教育を推進したかという問いは、あるいは推進しないのではないかという疑いを含んでいる。道徳を教える時間を設けたのに、それが、教えることにならないというのは、いかにも不思議なことであつて、そういう問いがどうして出されるのか、そういう問いを出す人は頭が狂っているのではないか、道徳の時間が設けられたが先生がごまかしていてやらないとか、或は時間を設けるふりをして設けないとかいうことででもなければ、道徳時間をおいたのに、道徳教育が推進されないとは、ちよつと考えられないことである。頭が狂っているのではないかという結論になるゆえんである。

特設時間が道徳教育にならないと考えている人はいるだろうか。この点についても、ざつとばらんに、いろいろな人の意見を聞いてみたが、トコトンまで聞いてみると、特設時間が道徳の教育にならないと考えている人は少ないようである。いやそういう人にはお目にかから

なかったといつてよい。だから、特設時間が道徳教育にならないと考えている人はいないといつてよいようにも思える。もつともその中には、やればやっただけのことはあるでしょうという人もいた。あまり積極的に支持するわけではないが、しかしそれが行なわれれば行なわれたなりに、なにかにはなるという言い方はかなりいた。その意味では、何かにはなるものが、特設時間として設けられたのであるから、推進したのだという側の意見になりそうである。

こういう風に聞いた所では、出題者に対する答えは、肯定的な答えになりそうである。

### しかしそれは無力であった

ところで、次に私はちがった問い方をして聞いた。与えられた出題を多少変えたのである。道徳時間は、子どもの道徳を推進したかというように変えたのである。そうすると不思議なことに、前にのべたような答えを出した人々もこんどは必ずしもそれと同じような肯定的な態度ではなかった。いな、むしろ極めて消極的な答が多かったのである。ほんのちよつとした言葉のちがいで、そのように答が変わるのは極めておもしろいことであつたが、問題はどれもその辺にあるのである。つまり子どもはあまりよくはなつていないというのは、先生方の感想のようである。とくに道徳時間のためによくなったというようには考えられないということである。子どもはよくなったか、わるくなつたかという点については、さし当つてどうというように答えられないようである。しかしどちらかといえば、これでいいという状態にはならないという感じ方のようである。しかしそれが、そのまま続いている、もう少しなんとかならないかという焦りがある。この焦りはどうも特設時間によっては解消されて行かない。その理由はどうしてかといえば、結局社会がわるいのではないだろうかというところに帰着する。そして学校の無力をなげくの

である。しかし、社会がわるいという答が出ると安心できらしく、これは先生方の一種のかくれみの役目をなしているようである。

さてこれを整理してみると、結局道徳教育は一応推進したといえるようだが、子どもはよくなったわけではない。教育は推進されたが、子どものよくなるのはそれとは別物であるということになる。これはたいへん重大な結論のような気がする。つまり教育は、——今おとながやっている教育は、子どもがよくなることとは無関係なのだという結論だとしたらたいへんなことになるといわざるを得ない。そして学校の道徳教育がそう無力であるのは、学校外の社会に大きな原因がある。本当かどうかは検討する必要があるかも知れないが——と考えて、学校の無力感を味わっているとしたら、これも重大である。そういう無力感の上に立つて、何がやられても大したことはないのではないか。話がすこし先へとぶが、道徳の教科書をつくって、更に道徳教育を推進（？）したとしても、その土台が無力感であつたら、それ程期待はできないということになる。

### 無力感の根底

学校における特設時間の道徳教育の無力だということは従来からも別な言葉で語られているのである。戦前にだっていわれたことである。あるいはヨーロッパなどには、宗教が強い力を発揮しているとか、家庭教育がしっかりしているとかいわれている。もしそうだとしたら今のおとなは、家庭教育からやり出したらいのである。それをしないで、学校教育の無力感をなげいていても仕方がないことであろう。

しかし家庭で道徳教育をするということになると、両親が、先生のように、お説教をしたり、教科書を読んだりすることになるのだろうか。そんなことはできないから学校の先生にまかせるのだというであろう。しかし外国の家庭教育はしっかりしているというのは、外

国の家庭のおとなが先生のやるようなことをやっているということではあるまい。とすると、家庭教育がしっかりしたらよいということでは、学校の道徳教育とちがった形の道徳教育がしっかりしているということであろう。それは何であろうか。

学校の道徳教育に対する無力感というのは、このように考えてくると、道徳教育のやり方はもつとちがったやり方が有力なのであって、学校の特設時間の道徳教育は、無力な道徳教育なのということになりはしないか。無力な道徳教育を推進して、ゼロにゼロをたして——それ程に無力だとは考えられないようだが——あくせくしているのが、現代道徳教育の推進の現状だとしたら、考えなくてはならぬことではないか。

「道徳時間は道徳教育を推進したか」という妙な問題——道徳を教育する時間を充実したのは道徳教育を充実したことになったのかと言いかえたら、これは明らかに矛盾である——が出るのは、実はそこにもやもやとしたものがあるからなのである。道徳の教育というものを学校の教育のわくの中で考えていることがこういう奇妙な問題を出すもとなっているのである。われわれのやっていることはこれでいいのかということなのである。そして、やはりよくないのではないだろうか。根本的に改める必要があるのではないだろうか。

われわれのやるべきことは、学校の授業の時間の中に、道徳という時間をつくることではなくして、子どもの道徳的行為ができあがってゆくことを考えて、実行するということなのである。それをするには、道徳教育という言葉で、学校教育のわくの中へ閉じこめておくことが問題だということなのである。無力感や学校の中に閉じこもっているから出てくるのである。ならば、もっと広い立場で考え直すことに行かねばならない。

そういつても、教育といえば、学校でやることになっていて現在むずかしいことであろう。現になかなかそうならないから、依然として、

特設時間などという週一時間が問題になるが、それは教師の独善である。その独善で、道徳教育が成り立つはずがない。教師は五〇人の生徒の前だけで教師であって、一人対一人ですべてつき合わない。一人対一人ですべて生活して行く中に、子どもがそういう精神の習性と行動の習慣をつみあげるのである。家庭教育がたいせつだというのは、父母と子どものつきあいの中で共に生を営む間に、心の習性や行為の習慣を身につけるからなのである。

一斉授業の中で聞いたたり、またしゃべったりしたことはたいして忘れてしまうものであることは、道徳のことよりも他の教科の授業で実証済みであることは誰も知っている。他の教科は試験の時だけおぼえていればそれでよいから、なんとかやって行くわけだが、道徳教育は試験の時だけおぼえていなければよいというのでは、全くお話にならない。日常生活の中で身につけた態度であり、ふるまいでなくてはならぬのである。そういうものが、週一時間の話し合いか、お説教かでき上って行くことをめぐって人々が頭をなやましていく。そして、結局やっていると、少しはましだろうというあきらめが、先生方の間にひろがっている。このあきらめの上になにをやっても大したことにならない。それ自体不道徳であるともいえる。それが一番根本的な問題である。結局無責任なのである。無責任時代の道徳教育なのである。

### 本物でない道徳教育

子どもの精神をつくり、行為をつくらうとするならば、それは一人一人をみて、一人一人にぶつからなくてはならぬものである。人をみて法をとけというけれども、一対一のぶつかり合いが最もたいせつである。現代の教育が、教育というものを、教師だけの活動というようにしてしまつて、人間対人間のつながりの中で考えていないのは、一斉授業の形の中で、墮落させられてしまったからである。五〇人の生

徒を前にして、教師がスターとなって大活躍をしている。それ自体が苦勞なことであるという前提が、実ははじめからおかしい。それが無力感をさそうのである。われわれの自業自得というべきである。

道徳の教育は、結局、日常生活の中へ還元されなければならない。そこから出直さなければならぬ。そうなる学校の手には合わないというかも知れない。しかし学校は地域の教育の中心だなどと口でいさましく言っているではないか。そういう考え方を実行にうつしたらよい。PTAといっしょになつて、子どもの日常生活をしっかりとさせる道を考えるべきである。しかしそれは子どもだけに要求するわけには行くまい。おとなが子どもといっしょに生活しているのだから。そうなる、それはおとなの問題である。おとながまず自己の生活をふりかえつて、正しい態度をもつべきだ。それをしなければどうにもならないことはあまりにも明白である。

そこまできると大ていおとなは逃げごしになるのである。それは、そうなつたら、自分が真先に落第するだろうと知っているからである。自分にはできないことを知っているのである。自分にできないものを、子どもに要求しない方がよい。そういうことが本当の道徳を育てないものである。その心根が、学校の先生に道徳教育をまかせて、自分は道徳をしているのである。そういうことだから、学校でやる道徳教育もまた、地に足がつかない、観念論になるのである。もっともらしいことをいうだけに終わってしまう。

もし毎日の日常の中で、本当に振舞いつつ考えるようなことになつたら、本当に具体的なものが生まれるのである。そして世の中もよくなるであろう。実行不可能なことは言えないはずなのだ。言つたなら実行しなくてはならぬはずだ。それだけのきびしさが、真の道徳を育てるのである。それが道徳教育が有力だということであるのである。本物でない道徳教育をやつていけば、いくら形の上でやつてもそれは

むだだということである。

### おとなと子どもといっしょにやること

道徳的行為というものが授業で育てられるという感覚を払拭しない限り、道徳教育は本当に推進したと言えるようにはならないだろう。道徳とは、口先だけのことではない。頭で考えることでもない。諺に「椅子が人間を育てる」ということがあるが、その椅子にすわらなければ、それにふさわしい態度、振舞ができるようにならないのである。そういう考え方をすることがたいせつであろう。

愛国心などということでも、口先や頭の中のいわゆる高尚(?)なことではない。毎日の生活で社会の中に生き、社会人のために働き、みんなといっしょにのびて行く生活をいとむことの中にでき上る心情の習慣である。道路をよごし、人と争つて自分だけのことを考えて生活していて、いっこうなんとも感じないという生活からは生まれてこないであろう。道路をよごさず、乗り物に正しく乗れるということが愛国心のあらわれなのである。日本の教室の中の愛国心は、そんなこととかかわりない高尚(?)な教育であるが、それがいけないのである。口先きで人をごまかすこととうまいのが勝ちを占めるのである。教室のなかだけで道徳教育をやり、他の部門でやらないのは、そういう表むきと実際の行為との間の分裂をつくりあげ、裏はらの人間をつくるのである。道徳特設時間を設けたのは、やむにやまれぬ気持ちからであることは認められるが、そうした熱意も結局ピントがはずれておれば、かえつて悪い結果をもたらすことになっている。師弟同行ということがあるが、おとなも子どももいっしょになつて同行するよいうな道徳教育を考えなければならぬ。みんないっしょに苦勞するところが最も道徳的であつて、それが同時に教育にもなるのである。

> 国立教育研究所<